

あらすじ

推理が嫌いな探偵、人見吏志は友人で刑事の鷹尾慶太に密室殺人事件の解決を依頼された。

当然断ろうとするが、弱みを握られていた人見は嫌々ながら事件現場である壽松木家を訪れた。

壽松木葉菜子の婚約者、太央市籠が何者かに殺害されたというこの事件。関係者の両家家族から事情を聞いた人見は、終始不機嫌なままだったが、不可解な点と見抜いた嘘を上げ、無意識ながらも推理を進める。

翌日、再度顔を合わせた両家に人見が突き付けた嘘の真実は、市籠と壽松木家の執事、輪瀬允典が恋仲であったということだった。

未知の関係に混乱し、心無い言葉を零す父親たちに、二人の愛の美しさに惹かれ、婚約を決意した葉菜子は怒りを向ける。真実の愛だと訴える葉菜子に続き、人見は未知を恐れず知る努力をするべきであり、人の趣味嗜好には寄り添わなければならないことなどを語った。

その後、事件は無事解決の道を進んだ。

登場人物

人見 吏志（30）探偵

鷹尾 慶太（30）刑事・人見の友人

振原 一実（20）大学生・探偵助手

壽松木 喜多彦（60）壽松木家当主

壽松木 波留子（55）喜多彦の妻

壽松木 葉菜子（25・28）市籠の婚約者

輪瀬 寿宏（52）執事

輪瀬 允典（27・30）執事・寿宏の息子

太央 繁昌（55）太央家当主

太央 柳您（35）繁昌の嫁・中国人

太央 市籠（27・30）葉菜子の婚約者

男子大学生（20）一実に告白される

○盧胡^{ろこ}大学・中庭

向かい合って立っている男子大学生（20）

と振原一実（20）。

男子大学生「（頭を下げ）ごめん！」

一実「えっ」

男子大学生「俺、振原のことそういう風に見れな

い。ホントごめん」

男子大学生、立ち去る。

一実、呆然と見送る。

一実（M）「振原一実二十歳。たった今、失恋回数19回を更新しました」

T【大学生・振原一実】に【失恋19回】
が追加。

○ビル・人見探偵事務所・外観

レンガ張りの二階建てビルに事務所の看板。

一階に喫茶店、二階に探偵事務所。

一実（M）「ここは私のバイト先、家政婦として働
いています」

一実、喫茶店横の階段を上がる。

○同・内

海外のアンティークが飾られている。

ロココ調の机と皮張りの社長椅子。

その前に客人用のソファとローテーブル、

同じくロココ調。

一角にはカウンターキッチン。

一実「(ドアを開ける)こんにちはー」

人見吏志(30)、机を叩く。

一実、驚く。

人見「断る」

英国紳士のようなスーツを着こなした人見、

向かいに座っている人物(鷹尾)を睨む。

一実(M)「この方は人見吏志先生。この事務所の所長で唯一の探偵さん」

T【探偵・人見吏志】

鷹尾「そんなこと言わないで欲しいなー」

ここにこしている超絶イケメンの鷹尾慶太

(30)、フォーマルスーツ姿。

一実(M)「先生のお友達の鷹尾慶太さん。職業

は刑事さんです」

T【刑事・鷹尾慶太】

人見「嫌だね、専門外だ」

人見、そっぽ向く。

溜息を吐く鷹尾、一実に気づく。

鷹尾「やあ、お邪魔してるよ」

手を振る鷹尾の背景に薔薇が咲く。

一実(M)「今日もかっこいい」

一実「(はっとして)ゆっくりして行ってください」

一実、キッチンへ行き、ケトルでお湯を沸かす。

鷹尾「ここ最近の仕事は？」

人見「浮気調査」

鷹尾「と？」

人見「……(ない)」

鷹尾「この家賃と可愛い助手のお給料は払えるのかなあ」

一実(M)「そうなんです。うちは先生があんな感じだから依頼が少なくていつもカツカツ」

一実、コーヒーカップを出す。

人見「助手じゃない、家政婦だ」

鷹尾「同じようなもんじゃないか」

人見「どこがだ。仕事の手助けは一切受けてないぞ」

鷹尾「一実ちゃんのおかげで生活が保たれているんだ。立派な助手だよ」

コーヒーを持ってくる一実、それぞれの前に置く。

鷹尾「ありがとう」

舞い散る薔薇。

一実「いえ」

一実、花びらを受けながら笑顔を返す。

人見「ミルクは？」

一実、人見の前に大きなミルクピッチャーを置く。

一実「どうぞ（ガン飛ばし）」

人見、コーヒーに大量のミルクを入れる。

鷹尾「そうだ、一実ちゃんも一緒に聞いていくかい？。」

一実「はい、ぜひ」

人見「はあ？」

一実、人見の横に座る。

人見、舌打ち。

一実、舌打ちし返す。

鷹尾、鞆から資料を出す。

鷹尾「先日、殺人事件が起きたんだ。殺害されたのがスズキハナコさんの婚約者――」

人見「ダサイ名前だな」

一実「全国のスズキハナコさんに謝ってください」

人見「フン」

鷹尾「――タナカイチロウさん」

一実「ダサッ」

人見「お前も全国のタナカイチロウさんに謝るべきだ」

一実、むっとする。

鷹尾「何者かに後ろから刺されて死亡。しかもそれが密室だね」

人見、クリーマーを出してミルクを泡立てる。

一実（M）「はっ!? 何してんの!？」

鷹尾「他殺なのは明らかだけど、問題は密室

の謎なんだ。内側からカギがかけられ、窓も閉ま
っていた」

人見、ラテアートを作る。

未知の生物が出来上がっていく。

一実(M)「怪物……？」

鷹尾「今回は何？ シロクマかな」

人見「ネコだ。話は終わりか」

人見、アートの部分を音を立ててすすす。

一実(M)「うわ……」

鷹尾「何かわかった？」

人見「何度も言うが僕は推理が嫌いだ。推理をし
たくて探偵になったんじゃない。堂々と人間観察
をしたいから探偵になったんだ。毎度毎度行き
詰った事件を持ってこないでくれ」

一実「堂々と変態発言しないでください」

鷹尾「嫌いだっていうくせに得意だろ？」

人見「得意じゃない！」

鷹尾「一実ちゃんを見て思うことは？」

人見「(見もせず)今日もフラれて傷心中」

一実「はっ!？」

鷹尾、さすがという顔。

一実「な、何ですかいきなり。っていうか勝手に決めつけないでくださいよ」

人見「はあ？ 一目見ればわかるだろ。普段より気合が入った化粧なのに Mascara だけ落ちて目も充血している。恋愛体質であることからまたフラれたんだろうと思っただけだ。それはそうとこれで何度目だ？ 20 連敗じゃないか？」

一実「じゅ、19 回です！」

鷹尾「（笑う）ほらね、その調子でなんだかんだいっても解決してくれるじゃないか」

人見「知るか！ 事件は警察で解決しろ。僕は推理アレルギーなんだ。お前が顔を見るだけで悪寒がするようになった。どうしてくれる。もうさっさと帰ってくれ」

一実（M）「推理にアレルギーはないでしょ」

鷹尾「お土産でミルクケーキを持ってきたんだけどな」

鷹尾、鞆からお菓子の箱をチラッと出す。

人見、動きが止まる。

鷹尾「あと北海道産ミルクアイスも」

鷹尾、冷凍庫をちらっと見る。

人見、鷹尾を見る。

鷹尾、にっこり微笑む。

一実(M)「そうなんです。先生は乳製品に目がないんです」

タイトル「探偵さんは推理がお嫌い！」

○壽松木家・外門

T【次の日】

豪邸を見上げる三人、正装。

一実「家も漢字もやば。これでスズキ？」

鷹尾「何度来てもびっくりするねえ」

一実(M)「鷹尾さんもやばーい」

人見、はっとして。

人見「いや待て、何でこいつも居るんだ」

人見、一実を指さす。

一実「(払う)指ささないでくださいよ」

人見「しかもこの服！ 一体いくらしたんだ。経費で落とさないからな」

鷹尾「似合ってるよ。一実ちゃんも」

鷹尾、ウイंक。

一実(M)「(胸を押さえて)はうっ」

人見「視力と色覚が腐り落ちたか。これのどこが似合っていると言うんだ。ゴーレムが花を飾っている方がましだろ」

一実「ひどい!」

鷹尾、呼び鈴を鳴らす。

寿宏(声)「はい」

鷹尾「鷹尾です」

寿宏(声)「お開けいたします」

門が開く。

入る鷹尾、続く人見と一実。

人見「出さないからな、一銭も」

鷹尾「心配しなくても二人はレンタルだから」

人見「レンタル代も出さないからな」

一実(M)「私達はレンタル……。えっじゃあ鷹尾さ

んは自前……。?」

○同・一階・玄関

扉を開ける執事の輪瀬寿宏（52）と息子の允典（30）。

床は大理石、壁には有名絵画が飾られている。

一実「（きよろきよろ）家の中もす……」

人見「貧乏人丸出しだぞ恥ずかしい」

一実、むっとする。

壁に掛けられた絵を二度見する人見、駆け寄って舐めるように見る。

人見「これは素晴らしい」

一実「（小声）恥ずかしいのはどっち……」

寿宏「どうぞこちらへ」

寿宏、案内する。

一実、人見を引きずっていく。

○同・広間

溢れるように人が居る広間、それぞれワインやジュースを手に持っている。

人見「何だこれ、まるでパーティじゃないか」

鷹尾「一応追悼式なんだけどね」

人見「だったらタナカ家でやるべきでは？」

鷹尾「その意見には賛成するよ」

ウェイターからドリンクを勧められる一実、

シャンパンに手を伸ばす。

人見、横からオレンジジュースを二つ取って

一実の一つ渡す。

一実「何ですか」

人見「アルコールはやめておけ」

一実「私、成人してるんですけど」

一実、渋々受け取る。

人見、もう一つを鷹尾に押し付ける。

貰う鷹尾、飲む。

壽松木家が広間に入り、静かになる。

お辞儀をする壽松木波留子（55）、化

粧が濃い。

隣で偉そうに立っている夫の喜多彦（60）

とその後ろに娘の葉菜子（28）。

一実「（小声）すっげえ」

人見「（小声）化粧がえぐいな」

鷹尾「（小声）今日は控えめな方だよ」

一実と人見「（小声）あれで？」

波留子「皆様、今日はお集まりいただきありがとうございます。もうご存じかと思いますが、先日娘の婚約者がお亡くなりになりました。入籍を間近に控えていたことで私共々大層心を痛めております」

波留子、ハンカチを目に当てる。

一実「（小声）いいお母さん」

人見「（小声）嘘泣きだ」

一実「（小声）えっ」

波留子「せめて未練が残らぬようお送りしたく、今回ささやかながらこのような催しを開かせていただきました。皆様どうか、故人を想いお祈りください」

波留子、頭を下げる。

拍手が起きる。

喜多彦「さあパーティの始まりです！」

一実「パーティって言っちゃってますよ」

人見「言ったな」

鷹尾「言っちゃったね」

音楽が流れ、料理が運ばれてくる。

一実「何ですかこれ」

鷹尾「何だろうね」

人見「自己満足だろ。金持ちは訳のわからない理由でパーティしたがるからな」

葉菜子、広間から出て行く。

一実「葉菜子さんが可愛いそう」

人見「どうだかな」

一実「ひどい。一番悲しいのは葉菜子さんですよ」

人見「現時点では容疑者候補だろ」

一実、むすつとする。

鷹尾、ニコニコしている。

人見「何だ」

鷹尾「いいコンビだなと思って」

人見「ふざけたことを」

人見、パーティの参加者を見る。

人見「タナカ家は居ないのか」

鷹尾「別の部屋に居るよ。一緒に話を聞きたいから待機してもらってる」

人見「それを早く言え」

寿宏、三人に近づく。

寿宏「お待たせいたしました」

○同・応接間

寿宏、扉を開ける。

壽松木家とタナカ家が向かい合って座っている。

三人、扉側のソファーに座る。

寿宏、壽松木家の後ろに立つ。

横に允典。

鷹尾「皆さんお揃いですね。さて、まずは自己紹介

から始めましょうか」

愛想笑いをする鷹尾、背景にガーベラが咲く。

一実(M)「刑事モードの鷹尾さんだ！」

波留子、鷹尾に見惚れている。

寿宏「では私からご紹介させていただきます。奥にいらつしやいますのが壽松木家当主、喜多彦様」

T【当主・壽松木喜多彦】

寿宏「そのお隣が奥様の波留子様」

T【妻・壽松木波留子】

波留子、会釈。

寿宏「そして葉菜子お嬢様です」

T【娘・壽松木葉菜子】

葉菜子、お辞儀をする。

寿宏「お次に太央家ご当主、太央繁昌様」

T【太央家当主・太央繁昌】

軽く会釈をする太央繁昌（55）。

寿宏「お隣が奥様の太央柳您様」

T【妻・太央柳您】

チャイナ服姿の柳您（35）、お辞儀。

一実「綺麗な人……」

人見「似合うものがわかってるな」

人見、一実を見て鼻で笑う。

一実（M）「むかつ」

寿宏「最後に私が壽松木家の執事、輪瀬寿宏と

息子の允典です」

T【執事・輪瀬寿宏】

T【執事・輪瀬允典】

寿宏と允典、お辞儀をする。

鷹尾「ありがとうございます。では私の方も簡単に。刑事の鷹尾です。隣は探偵の人見です」

人見「人見です。横のはオマケなので気にしないでください」

一実（M）「私の紹介アツサア！」

一実「助手の振原一実です」

人見と睨み合う一実、火花が散る。

鷹尾、手帳を取り出す。

鷹尾「本題に入りましょうか。事件は夜中に起きました」

○聴取内容・事件の再現

広々としたゲストルームに高級家具。

鷹尾（N）「被害は太央市籠さん」

黒子、市籠とかかれたプレートを首から下

げている、以下市籠（仮）。

鷹尾（N）「市籠さんは何者かに後ろから刺されて殺されました」

市籠（仮）、何者かに刺されて床に倒れる。

鷹尾（N）「第一発見者は――」

○壽松木・一階・応接間

寿宏「私です」

寿宏を見る人見、葉菜子に視線を移す。

葉菜子、俯いている。

鷹尾「通報は夜中の2時近くでした。その時間に何を？」

寿宏「私ども執事はいつでもすぐ対応できるように交代で起きております。当日は私が当番でした」

鷹尾「そうですか」

○聴取内容・事件の再現

鷹尾（N）「それからどうしました？」

寿宏のお面を付けている黒子、以下寿宏

（仮）、入り口に立っている。

寿宏（N）「旦那様と奥様を呼びにその場から離れました」

寿宏（仮）、部屋から離れる。

寿宏（N）「戻ってきましたらお嬢様と允典が部屋に居ました」

葉菜子（仮）と允典（仮）、入り口に立っている。

寿宏（仮）、喜多彦（仮）と波留子（仮）を連れて来る。

寿宏（N）「そして最後に太央様ご夫婦が」

繁昌（仮）と柳悠（仮）がやって来る。

○壽松木・一階・応接間

鷹尾「なるほど、では寿宏さんが居なくなったあと、

密室ではない状態があったと」

寿宏「その通りでございます」

鷹尾「なら部屋に潜んでいた犯人が逃げ出すこともできますね」

波留子「外部の人間がやったってことですか？」

鷹尾「まあ、可能性の話ですが」

人見、それぞれの顔を見ている。

鷹尾「どなたか気になった事などありませんでしたか？ 何でも構いません」

静まり返る室内。

一実「（恐る恐る手を上げて）あのお……」

鷹尾「ん？（笑顔）」

後光が差す鷹尾。

一実（M）「ぐはっ」

一実「き、凶器は見つかったんですか？」

鷹尾「ああ、凶器はまだ見つかっていません。敷地

内をくまなく探させてもらってもそれらしき物は

一切ありませんでした」

寿宏「（ふと）そういえば」

鷹尾「何か？」

寿宏「市籠様は普段着をお召しでした」

鷹尾「夜中の２時に普段着。不思議ですね」

波留子「（もじもじ）あのお」

鷹尾「はい（笑顔）」

波留子「（どきっ）お、お隣の方、探偵さんなんです

よね？」

視線が人見に集まる。

鷹尾「あー……（えっと）」

人見「推理しませんか？」

波留子「えっ？ 探偵なのに？」

喜多彦「ではなぜここへ？」

人見「（鷹尾を指さす）誘導されて」

鷹尾、笑顔でその指を握る。

人見「イツ！（痛い）」

鷹尾「解決させますので、大丈夫です」

人見、指を引っこ抜く。

人見「はあ？」

鷹尾、人見の口と鼻をふさぐ。

鷹尾「家の中を見たいので今日宿泊させていただ

いても？」

人見、もがく。

波留子「え、ええ。構いませんが」

鷹尾「ありがとうございます。では失礼します」

鷹尾、人見を引きずって部屋を出る。

一実、あとに続く。

○同・廊下

人見、鷹尾に掴みかかって。

人見「殺す気か」

鷹尾「いやいや」（へらへら）「

一実「ちょっとやめてくださいよ」

応接間から出てくる両家。

葉菜子、人見と鷹尾を見る。

一実、葉菜子に気づく。

眉間にしわが寄る葉菜子、背を向けて歩き出す。

人見、葉菜子を見ている。

鷹尾たちに允典が近づく。

允典「お部屋にご案内いたします」

三人、允典に続く。

○同・二階・ゲストルーム1

允典、扉を開ける。

豪華なシャンデリアが吊るされ、赤を基調に家具が置かれている。

允典「こちらは振原様がお使いくください」

一実「えっこんな広い部屋を？」

允典「レディですから」

一実(M)「レディ！」

テンションが上がる一実、走ってベッドへダイブ。

一実「きゃーふかふかー！」

人見「子供だな……」

鷹尾「可愛いね」

允典「ではお隣へ」

三人、移る。

一実、あとを追う。

○同・ゲストルーム2

允典、扉を開ける。

同じ家具の配置で青を基調にした部屋だが、一実の部屋より少し狭い。

允典「こちらは人見様ー」

人見「白はないんですか？」

允典「白は、今封鎖しております……」

人見、允典をじつと見る。

戸惑う允典、目が少し赤い。

人見、部屋を見て。

人見「まあ青も居心地よさそうだ」

一実「こっちもきれーい」

人見「何で居る」

一実「えーいいじゃないですかー」

允典「ではお次」

○同・ゲストルーム3

允典、扉を開ける。

同じ家具で緑基調の部屋、人見の部屋と

同じ広さ。

允典「こちらは鷹尾様」

鷹尾「ありがとうございます」

一実「色が違うだけで雰囲気違いますね」

人見「（一実の頭を鷲掴んで）戻れ」

一実「あー痛い」

○同・廊下

人見、文句をぶつぶつ言いながら歩く。

角を曲がるとその先に葉菜子が居る。

引き返す人見、こっそり見る。

葉菜子、窓の外を見つめている。

一実（声）「あー先生いいところに！」

驚く人見、振り返る。

葉菜子、立ち去る。

一実「お手洗いでどこにあるか知りませんか？ 広いし案内ないし困ってるんです」

人見「知るか、そこらへんでしろ」

人見、歩き出す。

一実「ひどーい」

人見、葉菜子が立っていた場所に立つ。

中庭に使用人の男が二人居る。

× × ×

一実、片っ端から部屋を開けまくる。

一実「えーん全然ない」

一実、部屋を開ける。

掃除用具がしまっている。

一実「ちがう」

一実、閉めようとして止まる。

一実、部屋を覗く。

部屋の中に允典、泣いているように見える。

一実、そっと扉を閉める。

一実「……？（はっとして）それどころじゃなかった」

歩く一実、角を曲がると葉菜子とぼったり
会う。

一実「あっ……」

× × ×

フラッシュバック。

鷹尾たちを睨むような葉菜子。

× × ×

葉菜子「どうかなさいました？」

一実「え、えっと、お手洗いを探して……」

葉菜子「（微笑む）ご案内しますよ」

一実「いいんですか！ ありがとうございます！」

○同・ゲストルーム2（夜）

ソファーに座っている人見、本を読む。

一実「先生、私凄いことに気づいちゃったかもしれないです」

人見「どうせくだらないことだろ」

一実「とりあえず聞いてくださいよ」

人見「はあん？」

一実「太央さん夫婦の名前の上と下くっつけると

ハンニンになるんですよ(ドヤ)「

○一実の妄想・ゲストルーム(夜)

市籠(仮)、倒れる。

背後の繁昌と柳窓、にやりと笑う。

○壽松木家・二階・ゲストルーム2(夜)

人見「ばかやろう(デコピン)」

一実「いったああ！」

一実、悶絶。

人見「お前は執事の話聞いてたか？ 講義中み

たいに白目向いて寝てたんじゃないだろな」

○回想・盧胡大学・教室

白目で寝ている一実、舟をこぐ。

○壽松木家・二階・ゲストルーム2(夜)

一実「し、してませんよ！ 講義だって真面目に受けてます！」

人見「(鼻で笑う)どーだか」

一実、人見の横で寝転がっている。

鷹尾、別のソファで資料を読む。

その横に紙袋がいくつか。

人見「いや何で集まっている……?」

鷹尾と一実「え?」

人見「え? じゃない! せっかく貸してもらった部

屋があるだろ! 帰れ!」

一実、起き上がる。

一実「広すぎて何か落ち着かなくて」

鷹尾「同じく」

人見「僕は! 一人に! になりたい!」

一実「あ、そんなことより先生」

人見「人の訴えをそんなことだと……?」

一実「お手洗いを探してた時に部屋を片っ端から

開けてたんですけど」

人見「自分がとんでもないことを言っているとわか

っているか?」

一実「この家、掃除用具をしまう部屋があるって

知ってました? そこそこ広くて人住めますよ、

あそこ」

人見「これだけ広い家なら不思議じゃないだろ」

一実「まあそうなんですけど。そこに允典さんが居
たんですよ。あれ多分泣いてたんじゃないかなあ」

人見「へえ？」

鷹尾、資料をしまう。

鷹尾「お手洗いにはちゃんと行けた？」

一実「はい、葉菜子さんが案内してくれて。嫌われ
てるかなーって思ってたんですけど、全然、すごく
優しくていい方でした」

頷く鷹尾、紙袋から岩手県産むかしの牛
乳を出す。

一実(M)「えっ!？」

鷹尾、ワイングラスに注いで人見に渡す。

人見、グラスを光に当てて眺める。

一実(M)「は？ 何してるの？ 牛乳でしょ？ ワ
インにしかそれやらないでしょ」

人見、飲んで一息つく。

人見「娘と執事が怪しいな」

一実(M)「えっ!」

鷹尾「どうして？」

人見「娘のあの顔、婚約者というよりもっと特別なものをなくしたように見える。執事はあの話し方だ。必要な情報は出しているが、これ以上追及されたくないように見えた」

鷹尾、紙袋から牛乳プリンを出して人見の前に置く。

人見、牛乳プリンを食べる。

人見「それと中国人と娘がお前（鷹尾）に反応してなかったな、女の大半が惚れるというのに。まあ、事件に関係ないだろうが。……そーいや執事の息子――」

鷹尾「允典さんが何？」

人見「……いや、プライベートな話だな」

一実（M）「餌付けだ……。あれだけ嫌がってたのにめちやくちや推理してる……」

鷹尾「そっか、じゃあ続きはまた明日だね」

鷹尾、立ち上がる。

一実「あつ、あの鷹尾さん」

鷹尾「ん？（にこ）」

咲き乱れる薔薇。

一実(M)「まぶしっ」

一実「その、泊りだと聞いてなかったの、明日の服がないんですけど」

人見「僕もだ。裸で過ごせと？」

一実「やだあ見たくない」

人見、威嚇。

鷹尾「ああ、ごめんごめん。ちゃんと用意してあるよ」

鷹尾、人見と一実に袋を渡す。

一実「えーありがとうございますー」

一実(M)「わーい、鷹尾さんが選んでくれた服だー」

○同・ゲストルーム1(朝)

一実「いやダッツツサー！」

一実、姿見の前に立っている。

生成り色の半袖Tシャツのど真ん中に白
目をむいて舌を出している真っ赤な顔がプ
リントされている。

下は大半が破けたダメージジーンズ。

一実「こんなのどこで見つけてくるの……」

ノックの音。

人見（声）「おい、まだ寝てんのか」

一実「お、起きてますよ！（扉へ）」

一実、扉を開ける。

人見、スーツを着ている。

人見「（吹き出す）……似合ってるぞ」

一実「絶対思っていないー！」

○同・一階・応接間（朝）

全員、昨日と同じ場所に座っている。

人見に続いて部屋に入る一実。

一実に視線が集中。

一実（M）「いじめだ……」

人見と一実、座る。

スーツ姿の鷹尾、一実を見る。

鷹尾「可愛いね」

人見、珍獣を見たような顔。

一実「あ、ありがとうございます」

一実（M）「もうなんでもいいや」

鷹尾「お集まりくださりありがとうございます。人

見が気づいたことがあるそうで」

人見「は？」

鷹尾「さあ（話して）」

人見、不満そうに。

人見「昨日の語りの中に虚偽がある」

壽松木家と太央家、顔を見合わせる。

寿宏、微動だにしない。

葉菜子、顔を伏せている。

波留子「どういうことなんです？」

人見「真実と異なるということですよ」

波留子「そ、それはわかってます！ 一体誰が嘘を

……」

静かになる室内。

人見、溜息を吐き面倒くさそうに。

人見「娘（指さす）」

葉菜子、驚いて顔を上げる。

人見「と執事（指さす）」

寿宏、表情を変えない。

人見「何か述べることは？」

波留子「寿宏！ ということなの！」

寿宏「……申し訳ございません」

波留子「ということは、あなたが――」

葉菜子「違う!」

波留子「え……じゃあ……(???)」

喜多彦「そ、そんなわけないだろ」

波留子「そうよね。そうに決まってる。でしょう?」

探偵さん「

人見「僕に聞かないでもらえますか?」

波留子「えっ」

人見「昨日推理しないと仰いましたよね?」

一実(M)「夜してたけど」

喜多彦「言うだけ言ってそれはないだろ! 無責

任だ!」

波留子「そうよ! ちゃんと全部説明してちょうだ

い!」

繁昌「探偵なんだからそれぐらい仕事したらどうな
んだ」

次々とヤジが飛ぶ。

黙っている人見、次第にムカついてきて。

人見「あー! うるさい! 僕は! 推理を!

しない！ 少しは自分で考える努力をしろ！
いつでも正解を人からもらえと思うな！ この
金の亡者が！」

一実（M）「最後ただの悪口」

人見「推理なんか誰がするか、怖気が走る。のた打ち回って吐瀉物をまき散らすぞ！」

一実（M）「絶対学校に行きたくない子供の言い訳みたい」

喜多彦、波留子、繁昌、ドン引きしている。

鷹尾、葉菜子を見て。

鷹尾「話していただけますか？」

葉菜子「……」

波留子「葉菜子、どうして？ あなたたち仲良くやっていたじゃない」

葉菜子「は？ やめてよ、私がやったみたいに言わないで」

波留子「で、でもあなた……」

葉菜子「嘘吐いた。それは認める。けど私は、絶対に市籠さんを殺したりなんかしない」

波留子「じゃあ、やっぱり……」

波留子、寿宏を見る。

葉菜子「寿宏さんは私の嘘に付き合ってもらっただけ」

喜多彦「何なんだ一体。はっきり言いなさい」

葉菜子「……、第一発見者は……私なの」

○回想・同・ゲストルーム・事件当日（夜）

T【事件当夜】

葉菜子、扉を開けると市籠（30）が床に倒れている。

驚く葉菜子。

葉菜子（N）「すぐあとに允典さんが来ました。私は寿宏さん呼びに行って、允典さんは厨房へ」

葉菜子と允典、部屋を離れる。

葉菜子、寿宏を連れて戻ってくる。

葉菜子（N）「寿宏さんは何も聞かず、第一発見者は自分になると言ってくれました」

○壽松木・一階・応接間（朝）

鷹尾「允典さんはなぜその時間に起きていたんです

か？」

允典「……それは……」

喜多彦「お前か！」

波留子「まさか！」

人見「んなわけねーだろ。これだから脳みそツルツル
民族は」

一実（M）「新しい民族産まれた」

喜多彦「き、君、さつきから失礼じゃないか！ 私

はこの家の当主だぞ、どこに目を付けているん
だ！」

人見「あんたこそ脂肪で眼球埋まっているんじゃないや
いのか？ そのツルピカ脳みそ使って考えればわ
かることだろ」

喜多彦「な、何をだ！」

人見「（呆れる）娘の婚約者と執事の息子が恋仲
だったことだよ」

全員、驚く。

寿宏、動揺しつつ允典を見る。

允典、俯いている。

波留子「そんなことって……」

波留子、繁昌を見る。

繁昌「（人見に）う、嘘を言うんじゃない」

人見「聞いてみればいい」

全員、允典を見る。

允典、床に手を着いて土下座。

允典「申し訳、ございません」

寿宏、慌てて土下座。

寿宏「愚息が大変なことを……！」

繁昌「（舌打ち）息子の分際で選り好みしてると

思ったら、あの出来損ないが……」

喜多彦「クソ、どいつもこいつも。とんだハズレをつか

まされた」

葉菜子「ふざけないで！ 二人の愛はここに居る

誰よりも美しく尊い愛よ！」

喜多彦と繁昌、驚く。

柳悠、土下座している寿宏と允典のそばへ

行き、頭を上げさせる。

葉菜子「二人がこうなるまでどれくらいの年月と

苦労が要ったと思う！？ あなたたちには想像

もつかないでしょうね！ それを知ろうともしな

いで出来損ないだのハズレだの、馬鹿にするのもいい加減にして！」

波留子「……葉菜子、あなた知ってたのね？ 知ってて市籠さんと婚約したの？」

葉菜子「ええ、そうよ。でもそれが何？ 悪いことなんて何もしてないじゃない」

波留子「けどあなたの気持ちは？ 跡継ぎは？ どうするつもりだったの？」

葉菜子「美しい愛を間近で見られるのなら私の気持ちなんてどうだっていい。二人が幸せになるためなら私は何だってする。子供も私が代理で産むつもりだった。医者にも話はしてある」

波留子「何てこと……。それじゃあなた、まるで道具じゃない」

葉菜子、波留子をビンタ。

葉菜子「二度とそんな言葉使わないで」

波留子、頬を押さえて呆然としている。

葉菜子「私は今まで色んな方とお会いしてきたけれど、惹かれる人は誰一人として居なかった。お金持ちの方も企業にお勤めの方も海外の方も、

皆同じ。でも、市籠さんと出会った瞬間、この人には何かあると思ったの」

○回想・同・広間・3年前

T【3年前】

パーティが開かれている。

壽松木家、太央家と対面。

葉菜子（N）「市籠さんは出会った時から優しかった」

タキシード姿の市籠（27）、ドレス姿の葉

菜子（25）に深くお辞儀をする。

葉菜子、お辞儀を返す。

葉菜子（N）「でも私に気がないことはなんとなくわかっていた。この人には想い人が居る、そう感じていたのに、私はどうしても市籠さんから離れられなかった。湧き上がってくるこの感情が何なのか知りたかったから」

○回想・同・二階・廊下・3年前（夜）

葉菜子（N）「ある日、私は見てしまったの」

寝間着姿の葉菜子、ティーポットと二人分のカップを乗せたお盆を持っている。

葉菜子、窓を見る。

葉菜子（N）「市籠さんと允典さんが手を繋いでいるところを」

中庭の木にもたれかかって座っている市籠

と允典（27）、手を繋いで笑い合っている。

お盆を落とす葉菜子、走り出す。

○回想・同・階段・3年前（夜）

葉菜子（N）「私はこの時、全てがわかった気がした」

葉菜子、階段を駆け下りる。

○回想・同・一階・玄関・3年前（夜）

葉菜子（N）「市籠さんが私に向ける視線や声の奥に憂いを含んでいた理由が」

葉菜子、扉を開けて外へ。

○回想・同・中庭（夜）

市籠と允典、談笑している。

葉菜子、駆けてくる。

葉菜子(N)「そして思ったの」

葉菜子に気づく市籠と允典、顔が固まる。

允典、繋いでいた手を離す。

市籠と允典の前で膝を着く葉菜子、それ

ぞれの手を握る。

葉菜子(N)「これは世界で一番綺麗な愛なんだ
って」

○壽松木家・一階・応接間(朝)

葉菜子「その日はたくさんお話をした。今までのこ
と、二人のこれからのこと、そして、三人でどう
生きていくか」

允典、俯いて涙を流している。

一実、号泣。

人見、一実を二度見して引く。

葉菜子「市籠さんは婿としてうちに入れば毎日允
典さんと過ごせる。允典さんは仕事として市籠
さんと一緒に居られる。その条件としてどんな

時も三人が一緒。そうすれば私は二人の愛を間近で見ることが出来る。これは得しかない婚約だった」

鷹尾「だからあの日、あなたが第一発見者に」

葉菜子「（頷く）はい。仕事を終えた允典さんが市籠さんの部屋に行くので、私も同じく部屋に」

鷹尾「そして市籠さんを見つけた、と」

葉菜子、涙を流す。

葉菜子「私は二人の愛が大好きだった。こんなに素晴らしい物がこの世にあるんだと、毎日神様に感謝していたくらい。それなのに、こんな……」

鷹尾「允典さんは厨房へ何しに？」

允典「……レモネードを置きに行きました」

鷹尾「レモネード」

允典「市籠さんはレモネードが大好きで、いつもお部屋にお邪魔する時は持って行ってましたので」

鷹尾「なるほど、皆さんが集まった時にレモネードを持っていたら疑問に思いますからね」

允典「動揺している私に葉菜子お嬢様がそう言うてくださり、厨房に戻りました」

繁昌「(溜息)バカ息子が。大した功績も残せない上に男が好きだなんて」

葉菜子「そんな!」

柳悠、繁昌をビンタ。

柳悠「これはあの子の分」

柳悠、もう一度ビンタ。

柳悠「そしてこれは執事の子の分」

繁昌、頬を押さえ涙目で柳悠を見る。

繁昌「ゆ、ゆうにゃん……?」

一実(M)「ゆうにゃん!」

柳悠「この世の宝であるBLを否定するあなたとはやっていけない」

柳悠、鞆から離婚届を出して繁昌の額に叩きつける。

柳悠「ずっと言っていなかったけど、私、BL作家なの。代表作は、夕日に染まったカーテンにくるまって話をしよう、キミの玄米茶はボクが作るよ」

一実「題名なっが!」

人見「何で玄米茶なんだ」

鷹尾「深く考えない方がいいよ」

柳悠、応接間を出る。

繁昌の額から離婚届がはらりと落ちる。

葉菜子、はっとして。

葉菜子「ま、まさか、柳谷ネコにやんにゃん先

生!？」

葉菜子、追いかける。

人見「何だそれ」

一実「ペンネームも長……」

鷹尾「深く考えな〜い」

喜多彦「(ボソボソ)男と男……? ありえないだ

ろ」

繁昌「(ボソボソ)前の妻が育て方を間違えたんだ。

俺は悪くない……」

人見、片足を机に叩きつけるように乗せる。

喜多彦と繁昌、驚く。

人見、足を組みながら。

人見「人は知らないものを恐れる、だから知ること

が大切なんです。培われた知識でしか物事を判

断できないから、知って理解するという努力が必

要なんです。知ることは簡単です。難しいことではない。ではなぜあなた方がしないのか、僕は不思議でしょうがない。そんな単純なことでもできないとこの先どうなるか教えて差し上げましょう。世間に迷惑をかける老害ですよ。幼児でもできることを怠った結果、歳だけ無駄に食って人に疎まれ蔑まれ、それにすら気づかず、世の中の心は自分だと勘違いした迷惑な存在。それを世間では老害というんです。そんなゴミより役立たないものになりたいのであればどうぞ、ご勝手に」

喜多彦と繁昌、目をそらす。

人見「人を愛することは何より素晴らしい。同性でも異性でも、それは変わらない。恋愛は異性でないといけないなんて決まりはどこにも存在しません。それを部外者が変だ狂っているだ病気だなんだと、首を突っ込む方がよっぽどおかしいんです。誰かの趣味嗜好を本人以外の人間が否定することがあってはいけないですよ」

喜多彦と繁昌、縮こまる。

静まり返る室内。

一実「あれ？　それで犯人は？」

鷹尾「（白々しく）ああ、そうだ。先ほど逮捕したと連絡が来ましてね。太央家のメイドです。旦那さんを狙ったそうですが、顔を見られてしまって咄嗟に、だそうですよ」

全員、呆然とする。

鷹尾「凶器も見つかりました。いやあ、解決してよかったですね。では、私たちはこれで」

鷹尾、出て行く。

溜息を吐く人見、あとに続く。

一実、ぼんやりしている。

人見、早くと手招きする。

はっとする一実、席を立つ。

○同・外門から住宅街（朝）

人見「最初から外部犯だとわかってたな」

一実「えっ!？」

鷹尾「（にっこり）何のことかなあ」

人見「お前なあ……!」

一実「まあまあ！　先生が居なきや葉菜子さんと

允典さんの気持ちは一生知ることができなかつたわけですし」

人見「それが何だっていうんだ」

一実「とても大切なことですよ。あの家族にとって、
すごく」

人見「……そういやお前泣いてたな」

一実「そりゃ素敵なお話でしたし」

人見、視線を外して。

人見「そうか、ならあれも素敵な愛だと言えるな」

一実「あれ？」

一実、人見の視線を追う。

道路を挟んだ向かい側の歩道で男二人が
手を繋いで歩いている。

片方は一実が告白した人物。

一実「えっ！？ どういうことですか！」

人見「そういうことだろ」

一実「な、なんっ！ え、っていか何で先生が知っ
ているような顔をしているんですか」

人見「あ？ 知ってるからに決まってるだろ」

一実「どうして！」

鷹尾「あれ、一実ちゃん知らない？ 心理学の講

師やってるよ？」

一実「何ですかそれ！ 聞いてないですよ！」

人見「探偵業だけであそこの家賃を払えるわけないだろ」

一実「えー？ 人に教えられるほどちゃんとしてる

ように見えないんですけど」

人見「学長がどうしても言うから行ってやってるんだ」

一実「うわ偉そう。まともに講義やらないで人ばかり見てるんじゃないですか？」

人見「そうだが何か？」

一実「ひっキモ！」

人見「だからお前がー」

○回想・盧胡大学・教室

人見（N）「講義中に白目向いて寝てるのも」

一実、白目で舟をこいでいる。

入口に地味な服装の人見が立っている。

人見、鼻で馬鹿にしたように笑う。

○回想・同・廊下

人見（N）「こそこそ隠れながらあいつを見ていたのも」

男、友達と喋りながら歩く。

一実、通路の壁に隠れて男を見ている。

その後ろの通路に居る人見、顔半分出して一実を見ている。

○住宅街

人見「ゼーんぶ知ってる」

人見、高笑いする。

一実「嫌な人ー！」

終わり